



# 能忍寺たより



## 行事紹介

### ○宗祖降誕会(しゅうそこうたんえ)

宗祖降誕会とは、各宗派の開祖(宗祖)が誕生されたことをお祝いする法要のことです。仏教ではお釈迦様の誕生日を祝う「花まつり」が有名ですが、宗祖降誕会は、それぞれの宗派が自らの教えの源流となった師へ感謝を捧げる、非常に大切に晴れやかな行事です。

特に広く知られているのが、浄土真宗の開祖・親鸞聖人の誕生を祝う行事です。親鸞聖人は「1173年5月22日に誕生されたため、毎年5月には京都の本願寺をはじめ、全国の寺院で盛大な法要が営まれます。本堂は華やかに飾られ、聖人の遺徳を偲ぶとともに、その教えに出会えた喜びを分かち合います。

また、真言宗では弘法大師(空海)の誕生日である9月5日を「青葉まつり」と呼び、新緑の中で祝うなど、宗派ごとに独自の文化があります。どの宗派においても、宗祖がこの世に生を受け、尊い教えを伝えてくれたことへの深い報恩の感謝が込められた、温かい節目の行事といえます。

## 今月のことば

### ○輪廻転生(りんねてんしゅう)

「輪廻転生」とは、生きとし生けるものが、生前の行い(業)に応じて死後に生まれ変わり、何度も生と死を繰り返すという仏教の世界観を表した言葉です。

仏教では、私たちは「地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上」という六つの世界(六道)を、回る車輪のように際限なく巡り続けると考えられています。このループは決して楽しいものではなく、思い通りにならない「苦しみ」の連続であると捉えられてきました。

お釈迦様は、この終わりのない輪から抜け出し、永遠の安らぎである「涅槃」に至ることを説きました。現代では「生まれ変わり」という神秘的な意味で使われることが多いですが、本来は「執着を捨てて迷いの連鎖を断ち切る」という、深い自己変革を促す教えが込められています。

### ○ラム あれもこれも仏教用語

#### ○報い

現代では「ひどい仕打ちを受ける」といった否定的な意味で使われがちな「報い」ですが、もともとは仏教の「因果応報」の理(ことわり)に基づく言葉です。

仏教において、私たちの「行い(因)」は必ず何らかの「結果(果)」をもたらすと説かれます。この行いに対して現れる結果そのものが「報い」です。良い行いをすれば良い報い(善報)があり、悪い行いをすれば悪い報い(悪報)があるという、極めてニュートラルな法則を指していました。

つまり「報い」とは、自分の投げたボールが自分に返ってくるような、世界の公平な仕組みを表しています。今の自分の状況を、過去の自分の行いの「報い」として真摯に受け止め、より良い未来のために今をどう生きるかを問い直す、前向きな教えが込められているのです。

## ポジティブな「諦め」

### ○諦める/明らめる

現代の日常会話で「諦める」という言葉を使うとき、多くの人は「途中で投げ出す」「断念する」といったネガティブなニュアンスを感じるかもしれません。しかし、この言葉の語源を仏教にまでさかのぼると、驚くほど前向きで知的な意味を持つことがわかります。

仏教において「諦める」とは、本来「明らめる」と書きます。これは、物事の真実の姿を「つまびらかにする」「明らかにする」という意味です。私たちは、自分の思い通りにならない現実を前にしたとき、執着や感情に振り回されて事態を正しく見ることができなくなり、そこで、目の前の状況を私情を挟まずに観察し、それが「変えられるものか、変えられないものか」という真理をはっきりと見極めること。これこそが仏教的な「諦める」の正体です。

たとえば、過ぎ去った過去や他人の心は、自分の力ではどうすることもできません。それを無理に変えようと執着し続けるから、心に苦しみが生じるのです。「諦める」とは、そうした「自分の力の及ばない道理」を正しく受け入れ、賢く身を引くことを指します。

つまり、単なるギブアップではなく、無駄な抵抗をやめて「次の一歩をどこへ踏み出すべきか」を明確にするための、非常に建設的な決断なのです。絶望して足を止めるのではなく、真理を明らかにして執着から自由になる。仏教が教える「諦める」は、私たちがより軽やかに、賢く生きていくための知恵の言葉といえます。